
花散る前に

佳奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花散る前に

【Nコード】

N1646D

【作者名】

佳奈

【あらすじ】

驚異的な美しさは悪をもちこむ。それならば、驚異的な醜さは、私を癒す、正の部分をもっているのではないか？そんな思いから、全てを手に入れた美しい女が、醜い男とかかわる事を決めた。

第1話：闇の中で

大正12年 6月19日

永い嘘をついてきました。

それは人を欺き、ある意味で傷つけるものでした。

私は美しかったのです。

雪のように白い肌も、大きな瞳も、長いまつげも、漆黒の髪も、私は鏡の前で身震いするほどに、自分が美しいということを知っていました。

そして、美しさと言う一見肯定的に見られる才能が、それが激しくも、強く“美しすぎた”が為に悪という名の性質をもちあらわということを私は感じずに入られなかったのです。

私は自分の美しさを持て余すかのようにして生きてきたのです。それは、人に好まれると言う境地を遥に越え、神秘的なほどの美しさは、私の肉親までも、戸惑わせました。

そして、三十歳を越えた頃から、私はある真実を見極めたいと思うようになりました。

それは驚異的な美しさが本当の意味での罪悪となるのなら、醜さもまた、正義となりうるのではないか、という考えでした。

醜悪という言葉がありますが、私にしてみれば、醜さは悪をはらむ物ではないのです。他者に絶対的な優越を与え、不快という名の快感を感じさせる、一種の救いのようなものなのです。

実のところ、私は醜いものを軽蔑して生きていた頃もありました。その頃私は人間に媚びを売ることで、財産を築き上げる段階にありました。私の自尊心の為に言っておきますが、私はその頃も、もちろん今も、体売るなどの下拙な方法で、財産を得ていたのではありません。私の微笑みが、生み出す物は、お金以上の価値をもっていたのです。だからこそ、私は醜いものを軽蔑していました。嫌、

むしろ私は怖かったのかもしれませんが。私が持っていた、たった一つの、私の全てが失われたら、自分もあんな風になるのではないかと、そう危惧していたのかもしれませんが。

ただ、今の私は違います。私はそれを手に入れ、私の考える主張を試してみたいと考えています。どうして私がここまでそのことに熱中するのか、自分でもわかりません。ただ、私はひどくそれを求めているのです。

そして、ついにその機会を得る事が出来ました。

私は、三、四年前から東京での暮らしを絶ち、この海の見える田舎へと移り住みました。お金は持っていました。ある資産家の方のご好意に甘え、私は黄楼館と、地元の人々に呼ばれる、西洋風の屋敷で住むことを決めました。黄楼と呼ばれるのにももちろんわけがあります。高台に位置する私の屋敷は。村の人々の住む港から見上げる位置にあります。そして屋敷の周りには、多くの桜の木が植えられています。桜の木を家の近くに植える事は不吉であるとよく言われます。しかし、屋敷を立てた方が、相当な西洋かぶれだったからなのか、実のところ本当に西洋人だったからなのかは、私にはわかりませんが、それは見事な桜の木が一面に植えられていたのです。とりわけ春の夕暮れに桜の花は、夕焼けに照らされ黄金色に輝きます。海での仕事を終えた貧しい村人たちは、高台を見上げ、その姿に毎年欠かすことなく、見とれてしまうのだそうです。そういったわけでその屋敷は黄楼館と呼ばれ、私もいつからか、黄楼の奥様とそう呼ばれるようになりました。

そして、私はそんな桜の季節に“その少年”と出会いました。彼は私の屋敷の桜の木々の林の中を無断で歩き回っていたのです。丁度、私が町から、帰ってきたときに彼を見つけました。彼はせむしでした。たださえ背は低いのですが、そのために丸みを帯び、大きな岩のようでした。私は元来、村人と関わることはありませんでした。村で一番の資産家だといっても、私はそれを鼻にかけたりはしませんでした。私はそんなことには興味がなかったのです。だから、わ

ざわざしかりつける気にもなりませんでした。ただ連れの下男が、大きな声で怒鳴りつけました。すると彼は転がるようにして逃げようと思いました。あまりに怯え、慌てすぎたのでしょうか。彼は幾度も転んだのです。立ち上がり、駆けては、また転ぶ。それを繰り返ししました。しまいに地面を這っているようにすらみえました。隣で下男は、怒りも静まり大声で笑い出しました。下女ですらくすくすとうそ忍び笑いをもらすのです。しかし、私はその時、彼には素質があるかも知れないと思いました。そう、私が求めていた絶対的な醜さに。

私は、彼を呼び止めました。そして、下男に彼をつれて越させました。少年は、罰せられるかとも思ったのでしょうか。涙をうかべていました。そして、その顔は私が想像した以上に醜かったのです。団子のような鼻、兎唇、浅黒い肌。ただ目だけが妙にきらきらと輝き、子どもらしく、かわいらしくもありました。しかし、それはその容姿には似つかはしく、その澄んだ瞳によって、彼の顔はより醜くく見えました。私の周りにいた人々は誰もが、その醜さに不快の念を感じていました。視界に入れるだけでも、恐れているようでした。ですが、その時の私の心の中は、喜びと神への感謝で満ちていました。私は周囲の当惑の目を無視して、微笑んで彼に語り掛けました。名前、年、親の名、そんな当り障りのないことを尋ねました。彼は名を“トシ”と言いました。今年で十五歳だと、私は彼がもっと幼く貧弱に見えていたので驚きました。彼はもじもじと体をくねらせながら、ゆっくりと言葉を放ちました。そして、私がどうしてここに来たのか、と尋ねると思ひもよらない返事をしました。

「…おっ黄樓さんの枝を」

私は彼の言葉を待ちました。

「枝を、折れと」

とそう言ったのです。彼に詳しい話を聞いてみると、彼は村の同世代の子供たちにふざけてそれを強いられたようでした。よく見てみると彼の体には痛々しいあざが多く残されていました。こんな容姿

をしているのだから、私は容易に彼の目の前の生活が想像できました。三男だと答えた時に、私の心は決まりました。彼を私の家で預かろうとそう思ったのです。そして、それはあっけにとられるほどに簡単に実現しました。実際、私は養子にとってもいいと思っていました。：もちろん私の現状の生活からしてその表現はおかしいですが。でも、それくらいに私には覚悟がありました。ですが、そう言うに足らず、彼は奉公人という名目で黄樓館の門をくぐったのです。

第1話：闇の中で（後書き）

もしよろしかったらコメントしていただけると嬉しいです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1646d/>

花散る前に

2010年10月28日05時13分発行